

# 古をゆく

播磨国風土記編纂 1300年

## たたら

「つわつ、顔が熱い」。燃え盛る炎に向かつて慎重に砂鉄を投入するのは、消防団員の法被を身にまとった宍粟市立千種中の生徒たち。冷え込みが厳しくなり始めた10月末、2年生32人が昔ながらの製鉄作業「たたら操業」を体験した。

名刀の素材「千草鉄」の産地として知られる宍粟市千種町。「たたら里学習館」の真庭に組み立てられた炉の温度は1000度まで達していた。観察窓をのぞいて砂鉄



【原文書き下し文】  
敷草村。草を敷きて神の座となす。故に敷草と曰ふ。この村に山あり。南の方に去ること十里ばかりに沢あり。二町ばかりなり。この沢に生える菅は、笠を作るにもっとも好し。梅、杉生える。鉄生ず。狼、麗住めり。栗、黄蓮、葛等あり。

【現代語訳】  
敷草の村。草を敷いて神の座とした。だから敷草と呼ぶ。この村に山がある。南の方に向かってかなり行ったところ、沢がある。周囲は二町(約200m)ばかりである。この沢に生える菅は、笠を作るのに適している。村には梅と杉が生える。砂鉄も出る。狼と麗が住む。栗や黄蓮になる黄蓮、葛などもとれる。

(監修 坂江沙・神戸大人文科学研究科地域連携センター研究員)

# 生徒鍛える千年の技



①夏休み中に千種川で磁石を使って砂鉄を採る中学生ら  
②守屋甲子振殿の炉を解体してケラを取り出す生徒たち(いずれも宍粟市で)

「千年以上も前の人もこうして製鉄していたなんてすごい。地域の伝統を受け継いだような気がする」と梅本聖斗君(13)。炭で顔を黒くしながらも、力を合わせて何時間も炉と向き合った。

原料となる砂鉄は、夏休み中に町の中心部を流れる千種川で生徒たちが採取。直径約10センチの磁石を川底や河原の砂地に押しつけると、泥に混じって黒々とした砂鉄がへばりついてきた。

膝まで水に浸かりながら磁石にびっしりとついた砂鉄を見せてくれた平瀬明佳さん(14)は「小さい時からいつも遊んでいた川にこんなに砂鉄があつたなんて」と驚いた表情。友人5人で採ると、泥混じりの砂鉄で袋がいっぱいになった。

良質の砂鉄は、山間部の花こう岩に含まれており、近代製鉄技術が伝わる明治初期まで、この川で大量に砂鉄が採取されてきた。高品質の千草鉄は、備前の刀匠らに珍重されて数々の名刀を生み、江戸時代には幕府直轄のたたら場として栄えたといわれる。

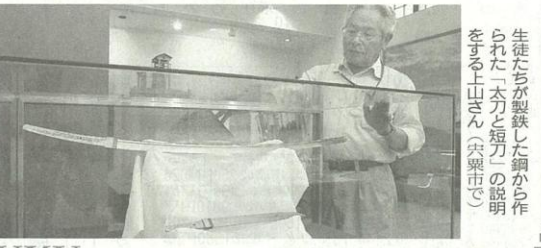
「町の誇りである製鉄技術を伝承したい」と、天児屋鉄山跡地に学習館がオープンしたのに合わせて製鉄実習を始めた。

2005年には、生徒たちが製鉄した鋼を原料に、刀匠に依頼して太刀と短刀を作刀。まはゆい輝きを放つ日本刀は同町の「宝物」となっている。

長年、実習を指導してきた臨時職員鳥居政義さん(64)は「包丁でも農具でも完成品しか知らずに育ってきた子どもたちが、鉄づくりを体験することで一回り大きく成長していく」と手応えを話す。

ジュワッ。約6時間後、火を止めた炉を解体し、取り出した真つ赤な塊を水の中に放り込むと、湯気とともに特有の臭いが周囲に広がった。ケラと呼ばれる鋼が姿を現した瞬間、見守っていた生徒たちから歓声が沸いた。

今回、取り出されたケラは約10kg。数十回にわたって投入した砂鉄は計29・5kg、木炭は103kgにのぼり、生徒たちの表情は達成感に満ちていた。「大好きなこの町で、鉄にかかわる仕事をしたい」と井口晃希君(14)。



たたら場跡で、若人の心にもたつ炎が灯った。(渋谷聖都子)

**砂鉄の産地**  
播磨国風土記には、敷草村(現在の宍粟市千種町)以外にも、産鉄の記述が見られる。同じ宍粟郡では、御方里(同市一宮町)の金内川にも「鉄を生ず」とあり、近世まで盛んであったたたら製鉄のルーツが古代にまでさかのぼることを示している。

る。讀容郡(佐用町)の鹿庭山には、四面に十二の谷があり、「みな鉄を生ず」との伝承が残る。この鉄を発見したのは別部大という人物で、その子孫が7世紀半ば頃、中央へ進上したという。近くからは古代の製鉄遺跡も見つかっており、砂鉄を原料に鉄を生産していたとみられている。